

砂浜守る手法検討

菅原 沼
市長 大谷海水浴場で

沼 仙 気

新たな堤防整備によつて、「海水浴場の砂浜が無くなるのではないか」という住民の疑問が高まる中、気仙沼市の菅原茂市長は13日、堤防を陸側に引く手法を選択肢の一つとして検討していることを明らかにした。まずは大谷海水浴場を対象に、堤防と防災林の背後にあるJR気仙沼線、国道45号を移設する可能性を探り、実現性について議論する考えだといふ。

海水浴場がある大谷とお伊勢浜には、景観や利便性に配慮して傾斜タイプの堤防整備を計画している。明治三陸級の津波を防ぐため

には、それぞれ海拔9・8メートルの堤防高が必要で、堤防下部の幅は35〜40メートルになる。いずれも宮城北部森林管理所が所管する治山施設で、既存の防災林内で整備する方針。その防災林幅は10〜30メートルしかないため、堤防は海側に大きくはみ出し、砂浜だった場所もほとんど埋もれてしまふ。

堤防の前面に砂を運び入れる「養浜工」といふ手法で砂浜を再生させるが、砂が根付くかどうかを確認するためのシミュレーションが実施できず、同管理所は「砂が100%戻るとはいえない」と説

明している。シミュレーションには長期間のデータが必要なのに、震災で海底の形が変化し、過去のデータを活用できないためだ。砂が高潮などで流されないため、砂の粒を大きくしたり、傾斜堤を緩やかにすることなどを検討しているもの、海辺で暮らしてきた住民は「砂が戻ってきている場所もある。自然の回復力を見てから判断してほしい」「堤防は陸側にバックしてほしい」などと計画見直しを求めている。

重点事業の一つ。養浜工で砂が戻らなければ問題なので、堤防を陸側に後退することができるといふ。ただ、実際に移設となれば時間を要するたため、災害復旧に関する期限面での心配があるといふ。

こつした中、菅原市長は13日の定例会見で、「海水浴場の砂浜復元は、市復興計画の

2012年7月14日付「三陸新報」1面